

『日本帝皇年代記』について——入来院家所蔵未刊年代記の紹介——(中)

山口 隼 正

On the Nihon Teio Nendaiki — An Introduction to an Unpublished Chronicle

Owned by the Irikiin Family — (Part 2)

Takamasa YAMAGUCHI

前回(上)は、「四十九 光仁天皇」までの分について翻刻、紹介したが、『長崎大学教育学部・社会科学論叢』六四号、二〇〇四年三月)、今回(中)は、続いて「五十 桓武天皇」(在位 天応一〜延暦二五、七八一〜八〇六)から「九十五 花園院」(在位 徳治三〜文保二、一三〇八〜一三一八)までを扱う。この時期は、先づ桓武天皇による平安遷都(延暦一三、七九四)があり、概ね平安〜鎌倉時代に当たる。以下、今回(中)収録分について、注目を挙げつつ、若干コメントしておこう。なお翻刻に際しての「凡例」は、前回に提示したので、ここでは示さない。

「天皇の見出し、〃〃天皇〃から〃〃院〃へ」

本書『日本帝皇年代記』において、天皇の見出しは醍醐(六十 醍醐天皇)までは〃〃天皇〃だが、つぎの朱雀には「院」とあり

(「六十一 朱雀院」)、つぎの村上で一旦は「天皇」に戻るが(「六十一 村上天皇」)、ついに冷泉(六十三 冷泉院)からは「院」と表記されてゆく(「八十一 安徳天皇」「九十一 後宇多天皇」「九十六 後醍醐天皇」は例外)。

ここで、あらためて広く年代記類を点検するに、概ね村上(六十二)までは「〃〃天皇」と表記されているが(「村上天皇」)、つぎの冷泉(六十三)からは「〃〃院」と表記されており(「冷泉院」)、後醍醐(九十六)についても同様だといえる(「後醍醐院」)。ただその間、安徳(八十一)のみは例外で、あくまで「安徳天皇」と表記されている(注1)。

「中国王朝名の表記」

本書『日本帝皇年代記』において、中国王朝名で「偽」を冠した

ものが五つ見える。「偽梁」(「偽梁太祖即位開平元年」―丁卯、九〇七年―など)、「偽唐」(「偽唐明宗即位天成元年」―丙戌、九二六年―など)、「偽晋」(「偽晋高祖即位天福元年」―丙申、九三六年―など)、「偽漢」(「偽漢高祖即位乾祐元年」―戊申、九四八年―など)、「偽周」(「偽周太祖即位広順元年」―辛亥、九五一年―など)の、五つである。この五王朝(「偽梁」―「偽周」)は、唐朝と宋朝との間、一般には五代と称される時期である(「後梁」―「後唐」―「後晋」―「後漢」―「後周」)に当たる。例の『帝王編年記』(巻十五―十六巻)では、この時期について「大梁」「後唐」「大晋」「大漢」「大周」と表記している。日本の年代記において、この時期の中国王朝名を斯様に「偽」を冠した例は一般には見かけないが、『和漢年代記』(長野県・光前寺所蔵、史料編纂所写真帳)の中巻(その上段「真丹年代記中巻」)においてその例が見られること(「偽梁」―「偽周」)に気付く(注2)。留意してよからう。

次は宋朝だが、本書『日本帝皇年代記』では基本的には「趙宋」と表記している(例えば、庚申―日本年号・天徳四年―九六〇年の欄に、「趙宋太祖建隆元年」とあり。太祖は宋―北宋の初代。注3)。いうまでもなく宋の初代皇帝が趙匡胤(太祖。在位九六〇―七六)であり、以下、宋が趙氏による王朝だからである。この点、因みに『和漢年代記』(中巻)では、初めは「趙宋」と表記するが(庚申―九六〇年の欄に「趙宋太祖玄朗」とあり、後掲「図3」参照)、基本的には「宋」としている(注4)。また『帝王編年記』では一貫して「大宋」と表記している(北宋―南宋を通して。巻十六―二十六)。

さて次は元だが、本書『日本帝皇年代記』においては、この王朝

名は用いず、前代(宋)と同様に「趙宋」と表記している(なお注23参照)。この点、『和漢年代記』では王朝名「元」を用いている。例えば元皇帝の成宗について、本書では「趙宋成宗即位元貞元年」(乙未、日本・永仁三年、一二九五)と見えるが、『和漢年代記』で該当する箇所には「元成宗」とある。

以上、本書『日本帝皇年代記』において、五代に対しては「偽」とか、元代に対しては「趙宋」となる表記がなされているが、何らかその事情を考慮、あらためて穿鑿すべきなのかもしれない。

「日本年号の改元日付」

前回(上)に述べた通り、「大宝」(元年、七〇一)以来、日本年号に対しては改元日付(月日)が記されて来た。この点、今回(中)収録分についてはいえば、主に三つの場合があると気付いた。改元日付が、①通説と若干異なる、②月日など通説と丸ごと異なる(弘仁―八一〇、昌泰―八九八、天元―九七八、天仁―一〇〇八、久寿―一五四、暦仁―一二三八、仁治―一二四〇、永仁―一二九三)、③全く記載がない(建長―一二四九、弘長―一二六一)、の三つである。最近刊行された米田雄介編『歴代天皇・年号事典』(吉川弘文館、二〇〇三年十二月)と対照、点検し、①の場合には適宜「校訂注」を付けたが(補注1)、②③の場合はそのままにした。特に②の場合、異説になる可能性もある(補注2)。

「生没年、特に生年の表記」

本書『日本帝皇年代記』は、多くの人物について生没日(年月日)、とりわけ生日(誕生日)までも記載している例が極めて多い。その

記載内容も概ね妥当である。この点、前回(上)で指摘したように、他の年代記類と異なる、本書の大きな特徴だといえる。このような例(生日・没日双方を記した)は、殊に密教系(真言、天台)の僧侶について多く、やがて禅系(特に五山系)のものが加わる。

今回(中)収録の期間については、この傾向が端的である。密教系でも真言僧が抜群に多い(本書全体において、真言系僧侶の生没記事は天台系僧侶の場合の三倍余に及ぶ)。天台僧の生・没記事は、もちろん最澄(伝教大師。日本天台宗の開祖、入唐。神護景雲元 \parallel 七六七生、弘仁一三 \parallel 八二二没)に始まり、円仁(慈覚大師。山門派の祖、入唐。延暦一三 \parallel 七九四生、貞観六 \parallel 八六四没)、円珍(智証大師。寺門派の祖、入唐。弘仁六 \parallel 八一五生、寛平二 \parallel 八九〇没)など著名な高僧(いずれも生日・没日記事兼備)について見えるが、実は十一世紀半で終わっている(注5)。真言僧の場合、空海(弘法大師。真言宗の開祖、入唐。宝龜五 \parallel 七七四生、承和二 \parallel 八三五没)に始まり、初めは京都の東密系(東寺、醍醐寺など)の高僧の生・没記事(兼備)が多いが、覚鑿(金剛峯寺座主。新義真言宗の祖。高野山大伝法院を創建し根来寺。嘉保二 \parallel 一〇九五生、康治二 \parallel 一一四三没)、ついで頼瑜(高野山中性院始祖、根来寺初代学頭―新義真言宗の教義を確立。嘉祿二 \parallel 一二二六生、嘉元元 \parallel 一三〇四没)が見えてからは、代わって新義真言系の僧侶(良殿・頼豪など、特に根来寺学頭)の生没記事が多くなり、このような点も、本書の特徴だといえる。本書には適宜、その間の、高野山における金剛峯寺側(―古義真言系)と大伝法院・密厳院側(―新義真言系)との確執についての記事もある(補注3)。

一方、禅系だが、本書において、はじめは達磨(禅宗の初祖)の

あと「二祖」―「六祖」まで中国禅僧の記事があるが(六 \sim 八世紀)、僧名は表記されていず、しかも彼らのうち、生・没双方の記事をもつのは「五祖」(弘忍)のみである。やがて「千光国師」―栄西(日本臨済宗の開祖、入宋。永治元 \parallel 一一四一生、建保三 \parallel 一一一五没)が出てからは、我が国関係の禅僧の生没記事が見え始める。生・没双方の記事がある(兼備)ものとして、この栄西の他、道元(日本曹洞宗の開祖、入宋。越前永平寺の開山)、「聖一国師」 \parallel 円爾弁円(入宋。京都東福寺の開山、聖一派の祖)、無関普門(南禅寺の開山、聖一派)、夢窓疎石(京都天竜寺の開山、夢窓派の祖)、虎関師錬(東福寺・南禅寺の住持。聖一派。『元亨釈書』の著者)、それに渡来僧の無学祖元(中国―宋出身、鎌倉円覚寺の開山)の例を拾える(補注4)。

「滅後・没後 \times 年のことなど」

以上、生没記事について述べたが、次に、散見される「滅後 \times 年」「没後 \times 年」なる記事について触れておこう。本書『日本帝皇年代記』の今回(中)収録分において、先ず「七十 後冷泉院」期の永承六年(辛卯、一〇五一)に「釈迦如来滅後二千年、末法之始也」と見える。我が国においては、例の『扶桑略記』(第二十九)の永承七年(壬辰、一〇五二)正月二十六日条に「今年始入末法」などあって、一般にはこの年(永承七年、一〇五二)が「仏滅二千年」に当たり、ここに末法が始まると見られている。本書の記事は、その前年のことである(注6)。実は『和漢年代記』(前出)中巻の皇祐三年(辛卯、一〇五一、日本・永承六年)に「仏滅二千年」とあって(注7)、本書と同様な見解だが、『永光寺年代記』(石川県羽咋

市永光寺所蔵、史料編纂所写真帳)では永承七年(壬辰、一〇五二)条に「入末法」とあって、『扶桑略記』と同見解だといえる。そもそも「入末法」の記事は、他の年代記ではあまり見かけないが、我が国では一般に『扶桑略記』の見解、即ち永承七年(一〇五二)説の方が普及している(なお後注13参照)。

釈迦の場合のみでなく、仏僧たちについても、“滅後〓年”(没後〓年)についての記事が散見される。いずれも、先に挙げたような、本書において生・没記事を兼備した僧たちである。先ず最澄(弘仁一三年〓八二二没)について「最澄勅号伝教大師入滅已後四十五年也」(丙戌、貞観八年、八六六)とあるのを始め、円仁(貞観六年〓八六四没)の「円仁勅号慈覚大師滅後三年也」(貞観八年)、円珍(寛平二年〓八九〇没)の「智証大師号入滅已後三十八年也」(丁亥、延長五年、九二七)と天台宗の高僧たちについて見え、これらの年忌はいわば端数である(端数だから、却ってその意義を穿鑿すべきなのかもしれない)。これに対して、少し時期が下るが、真言宗の空海(承和二年〓八三五没)については「弘法大師入定已後一百年也」(甲午、承平四年、九三四)とあり、また新義真言宗の頼瑜(嘉元元年〓一三〇四没)については「頼瑜法印百年忌」(癸未、応永一〇年、一四〇三)とあり、さらに臨濟宗―五山系の無関普門(正応四年〓一二九一没)については「大明国師百年也」(庚午、明德元年、一三九〇)などとあって、以後、真言僧や禅僧たちの年忌はいわば百年単位で表記されており、注目できよう。

ところで「八十二 後鳥羽院」期の建久六年(乙卯、一一九五)に「嶋津判官忠久薩摩下向」とある。忠久は島津氏の初代(守護)だが、ここに、この年代記(本書『日本帝皇年代記』)において地

域性が明確に顕れ始めたといえる。忠久の薩摩下向時期には諸説あるが、とにかく南九州は、以後しだいに島津氏(守護)守護大名(戦国大名)近世大名)の領国になってゆく。時代が下って、文祿四年(乙未、一五九五)に「嶋津判官忠久薩州下向四百年ニ当ル」とあるのは、将にこの記事に対応している。

〔文学作品―勅撰和歌集〕

本書『日本帝皇年代記』には文学作品に関する記事も含まれていることを、前回(上)で指摘した。ここであらためて通覧するに、それは、『万葉集』をはじめ、『新万葉集』を経て、『古今(和歌集)』以下の勅撰和歌集(天皇・上皇らの命により編纂された、二十一の和歌集。二十一代集)関係であり、要するに全て和歌集の記事で占められていることに気付く。それらの記事も概ね妥当である(注8)。『万葉集』に関する記事(大同四年、八〇九)をはじめ、『古今集』(延喜五年、九〇五)以下、勅撰和歌集についての記事で、その殆どは今回(中)に収められている(注9)。因みに『和漢年代記』(中巻、下巻)や『永光寺年代記』に見える文学作品も、本書と同様、『万葉集』と勅撰和歌集で占められているが、その記事内容は、本書『日本帝皇年代記』の方が詳細で的確だといえる。

〔記載のズレ〕

本書の本文について、手許の『東方年表』(藤島達朗・野上俊静編、平楽寺書店)や現在の年表類をもって通覧するに、殆どは妥当だが、記載に若干ズレがある箇所を見出す。殊に中国年号や諸事項についてだが、これらは、主に典拠史料(オリジナル)から転記の

際にズレたもの（ケアレス・ミス）といえそうで、概ね隣の年（隣の行）に移動すれば正せるのである。その箇所に（注）を施して、適宜コメントしておく。

（承 前）

辛酉天應 正月一日辛酉改元、依伊勢大神宮美雲也、同日地震、天災、兵乱、十二月廿三日光仁天皇崩、七十三歳、天台義真誕生、相州人、從傳教大師入唐、

十五 桓武天皇 元仁一子、母贈正一位高野乙繼女、四十八歳即位、治廿四年、延曆廿五年三月十七日崩、七十二歳、諱山部、是柏原天皇、長岡平安宮住、

壬戌延曆 八月十九日己未改元、依即位也、

癸亥二 法相守印法師誕生、姓土師氏、泉州人、從勝唐法師、文字相宗耳目之所觸長記不忘鼻根甚利也、

甲子三 十一月十一日遷都於山州長岡城、唐德宗興元々々年也、

乙丑四 七月中旬傳教大師十九歳始入比叡山、唐德宗貞元元年也、實惠僧都誕生、姓伯佐氏、讚劬人也、

丙寅五 嵯峨天皇・淳和天皇誕生、兄弟御母別也、

丁卯六

戊辰七 十月十五日弘法大師十五歳、自讃岐国入洛、實敏僧都誕生、姓物氏、尾州愛智郡人也、

己巳八

庚午九

辛未十 弘法大師十八歳、過勤操僧正受求聞持法、

壬申十一

癸酉十二 傳教大師廿七歳、建立延曆寺、弘法大師出家廿歳、師範操勤僧正、

甲戌十三 慈覺大師誕生、姓壬生氏、下野都賀郡人也、十月廿一日遷都於平安城、造立平野社、

乙亥十四 弘法大師廿二歳、於東大寺受戒、叡山安慧誕生、姓栢氏、内州大懸郡人也、

丙子十五 平安城羅城門左右建立東寺・西寺、建立鞍馬寺、岩泷勤操僧正始勤法華八講會、

丁丑十六 建立清水寺、四升善珠法入滅、七十五歳、真紹僧都誕生、

戊寅十七 惠運僧都誕生、東大寺明一入滅、七十一歳、

己卯十八

庚辰十九 真濟僧正誕生、姓紀氏、洛陽人也、桓武之師範等定大僧都入滅、

辛巳二十 十月依勅維摩會復興福寺、

壬午廿一 正月依勅屈最澄法師於高尾寺講天台法門、

癸未廿二

甲申廿三 (最澄) 傳教卅八歲入唐、從七月至九月、五月梵福山善謝入滅、八十一歲、弘法卅一歲入唐、從五月至八月、

乙酉廿四

五月傳教大師皈朝、真雅僧正誕生、弘法大師之弟也、十二月十五日惠果和尚入滅、六十歲、唐順宗即位永貞元年、(マ) 桓武第一子、母皇后乙牟漏、內大臣贈大政大臣藤原良繼女、卅三歲即位、治四年、天長元年七月一日崩、五十一崩、諱安殿、(マ)

丙戌大同

五月十八日改元、依即位也、三月十七日桓武天皇崩、七十二、唐憲宗即位元和元年也、弘法大師三十三歲皈朝、十一月八日弘法大師大和国久米寺始講大日經、普光寺慈雲入滅、四十九歲、

丁亥二

慈覺十五歲、登叡山、遇傳教受學止觀等云云、三論道昌誕生、姓秦氏、讚州香河人、入弘法室受密教云云、(マ) 四月十三日帝即位、宗叡僧正誕生、元興寺明詮誕生、

戊子三

五十 此御宇唐國之義空來朝、授禪宗旨於檀林皇后、 嵯峨天皇 桓武二子、母同上、廿四歲即位、治十四年、承和九年七月十五日崩、五十七歲、諱賀美野、

庚子弘仁

九月廿七日改元、仁明天皇誕生、六月勝悟法師入滅、八十歲、

壬辰三

真然僧正誕生、姓佐伯氏、讚劬入弘法大師之甥也、弘法大師於神護寺始被行傳法灌頂、(空海)

癸巳四 藤原冬嗣建南円堂于興福寺、空海鎮檀、(最)

甲午五

百丈大智禪師遷化 三月光意入滅、七十八歲、十月秋篠寺常樓入滅、七十四歲、三月安澄入滅、五十二歲、善議上足三論明德也、

乙未六

法相隆海誕生、姓清海氏、攝州人也、智證大師誕生、姓和氏、讚州、那珂郡人、父宅成、母佐氏、(同珍) 弘法之姓也、九月常騰法師入滅、七十六歲、(注10) 弘法大師始登高野山求勝地、(同) 八月大風、十一月道澄法師入滅、六十一歲、花山僧正遍昭誕生、

丙申七

天下大疫、空海應勅作心經秘鍵、品慧法師入滅、七十五歲、新羅沙門廿六人來朝、勅入諸寺、三月傳教上表乞建延曆寺戒壇、(同) 護命等七師捧表、簡之、十一月元興寺慈雲入滅、六十二歲、源仁僧都誕生、有疑、

丁酉八

高野大塔建立 十月空海賜傳燈大法師位、奉實法師入滅、八十四歲、

戊戌九

唐穆宗即位長慶元年 二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

己亥十

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

庚子十一

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

辛丑十二

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

壬子十三

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

癸卯十四

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

甲辰天長

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

乙卯改元

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

丙辰改元

二月最澄賜傳燈大(最)師位、六月四日入滅、五十六歲、号

乙巳二 義真不任延曆寺座主云云、職始於義真也、經五月十二日東寺建立講堂、空海自刻仁王經一曼荼羅本尊、唐敬宗即位寶曆元年

丙午三 葉平誕生、平城天皇之孫、阿保親王第五御子也、(葉)
(在唐)

丁未四 空海轉大僧都、五月十日勤操僧正入滅、七十歲、
文德天皇誕生、實惠僧都河內建觀心寺、益信僧正誕生、姓品治氏、備後人、武內大臣之裔、行教和尚之弟也、
学法相宗於大安寺、明詮後入源仁之密室、唐文宗即位大和元年

戊申五

己酉六

庚戌七 光孝天皇誕生、

辛亥八 相應和尚誕生、櫛氏、近州淺井郡之人也、入慈覺室、

壬子九 聖寶僧正誕生、光仁天皇之裔、讚州人也、弘法大師移住高野山、

癸丑十 續日本後記廿卷白(白)天長十年書嘉祥三年三月良房上、慈覺大師於叡山始修法花如法經、今首楞嚴院也、七月四日天台義真入滅、五十三歲、

仁明天皇 ニンミヤウ
嵯峨二子、母太后橘嘉智子、內舍人贈大政大臣清友女、廿四歲即位、治十七年、嘉祥三年三月廿一日崩、四十一歲、諱正良、号深草天皇、

甲子承和 正月三日乙卯改元、內裏建真言院、後七日御修法始之、九日十一日南都護命僧正入滅、八十五歲、

乙卯二 三月廿一日弘法大師入定、六十二歲、

丙辰三 實惠僧都任東寺長者、此任自實惠始、唐文宗開成元年

丁巳四 十月廿六日天台圓澄入滅、六十六歲、慧亮之師也、
或云此年菅丞相出現

戊午五 安祥寺僧都惠運・慈覺大師同船入唐、常曉入唐、又円行入唐、內裏仏名會始被行之、
(澄)

己未六 清涼大師入滅、百二歲、

庚申七 五月八日淳和天皇崩、五十五歲、取勝會移大極殿、六月常曉和尚賜山州宇治郡法琳寺、太元法、

辛酉八 唐武宗即位會昌元年

壬戌九 七月十五日嵯峨天皇崩、五十七歲、

癸亥十 天台增命誕生、京兆人、朝散大夫桑安峯之子也、十二月法相守印法師入滅、六十一歲、

甲子十一 天台玄昭誕生、慈覺之弟子也、

乙丑十二 十月十一日白樂天逝去、七十五歲、
(白樂天)

丙子十三

唐宣宗即位
大中元年
丁卯十四 十一月十三日實惠僧都入滅、六十三歲、慈覺大師皈依朝、五十四歲、在唐十年、
(同七)

戊辰嘉祥 六月十三日改元、依豊後國上白龜也、
八月興福寺明福入滅、七十一歳、

己巳二

庚午三 清和天皇誕生、三月廿一日仁明天皇崩、四十一歳、
四月帝即位、海印寺道雄入滅、

五十 文徳天皇 仁明長子、母太后藤順子、冬嗣女、卅四歳即位、治八年、天安二年
八月廿七日崩、四十二歳、諱道康、号田村帝、

辛未仁壽 四月廿八日庚申改元、

壬申二

癸酉三 九月延祥法師入滅、八十五歳、護命僧正弟子也、
智大師入唐、卅九歳、

甲戌齊衡 十一月廿日改元、依美作體泉也、慈覺任
延曆寺座主、觀賢僧正誕生、姓秦氏、讚劬人也、

乙亥二 九月長訓僧正入滅、八十二歳、

三月大地震 (飛騨以下同シ)
丙子三 西宮延敏誕生、初於東大寺孝三論、後入聖玉寬平之室、
五節舞始、九月實敏僧都入滅、六十九歳、美作献白鹿、

空海贈大僧正号、入室以後
丁丑天安 二月廿日改元、依常陸・美作上連理・白鹿也、
興福寺増利誕、姓伴氏、山州人也、從真然受密法、

戊子二 智證大師皈依朝、四十四歳、任唐六年船中新羅大明神顯現、約欲護持
教法、八月廿七日文徳天皇崩、四十二歳、十一月七日帝即位、

五十 清和天皇 文徳第四子、母太后藤明子、良房女、染殿后是也、九歳、受禪、治十八年
元慶四年十二月四日崩、三十一歳、諱惟仁、号水尾帝、

己卯貞觀 四月十五日辛丑改元、佛後一千八百八年也、
* * 八幡大菩薩男山垂跡大安寺行教和尚勸請、

庚辰二 興福寺常樂會始行之、唐懿宗即位咸通元年、
十一月廿五日真濟僧正入滅、六十一歳、

辛巳三 禅林寺僧正宗叡・真如親王同船入唐、
土佐國五臺山文殊出現、

壬午四

癸未五

甲申六 貞觀寺真雅任僧正許輦車、僧家輦車此時始云云、
正月十三日慈覺入滅、七十一歳、十月十日藤原良相薨、

乙酉七 宗叡僧正皈依朝、真如親王皇居渡天之時、流沙而入滅云云、
十一月晦日常暁和尚入滅、十二月三日德山禅師遷化、

丙戌八 七月取澄勅号傳教大師入滅已後四十五年也、円仁勅号
慈覺大師滅後三年也、二天師号依相應表也、日本大師号始也、

丁亥九

戊子十 山王院智證大師任延曆寺座主、
四月三日安慧入滅、七十四歳、
五月十六日明詮入滅、六十歳、

己丑十一 陽成院天皇誕生、九月廿三日惠運僧都入滅、七十二歳、

庚寅十二

辛卯十三

壬辰十四

癸巳十五 叡山禪喜誕生、姓藤氏、洛城人也、七月七日真紹僧都入滅、七十七歲、

甲午十六 建立貞觀寺、唐僖宗即位乾符元年也、

乙未十七 二月法輪寺道昌僧都入滅、七十八歲、

丙申十八

五十 陽成天皇 ヤウセイ 清和太子、母二条后藤高子、中納言長良女、九歲受禪、治八年、天曆三年九月廿九日崩、八十一歲、諱貞明、

丁酉元慶 キヤウ 四月十六日丁亥改元、正月三日帝即位、

五代院安然此御宇人也、入慈覺之室究顯密奧旨、又就花山僧止遍昭重受昭藏

戊戌二

己亥三 正月三日真雅僧正入滅、七十五歲、花山遍昭任僧正、五月八日清和天皇御出家、戒師宗叡僧正、同年受灌頂於宗叡、々山延昌誕生、後諡慈念僧正、

庚子四 十二月四日清和天皇崩、三十一歲、唐僖宗廣明元年也、業平逝去、五十五歲、

辛丑五 唐僖宗中和元年也、

壬寅六

癸卯七

甲辰八 三九 二月廿二日帝即位、三月廿六日宗叡僧正入滅、七十六歲、寬空僧正誕生、

五十 光孝天皇 仁明三子、母贈大政大臣總繼女、五十五歲即位、治三年、仁和三 三年八月廿八日崩、五十八歲、諱時康、号小松天皇、

乙巳仁和 六九 二月廿一日丁未改元、唐僖宗光啓元年也、西西天皇誕生、建立仁和寺、

丙午二 六九 円城寺益信賜傳法阿闍梨位、七月廿二日法相隆海入滅、七十二歲、

聖靈賜傳法阿闍梨位、
丁未三 六九 八月廿五日光孝天皇崩、五十八歲、十一月十七日帝即位、十一月廿二日源仁僧都入滅、六十九歲、唐僖宗文德元年也、(注11)

五十 宇多天皇 号寬平法皇 光孝天王第二子、皇后仲野親王女、廿三歲即位、治十年、承平元年七月十九日崩、六十五歲、諱定看、法名金剛覺、(注12) 又号空理、

戊申四

己酉寬平 四月廿七日戊子改元、唐昭宗即位龍紀元年也、

花山僧止遍昭慈覺之弟子
庚戌二 正月十九日遍昭僧正入滅、七十四歲、唐昭宗大順元年也、四月廿九日智證大師入滅、七十八歲、真然任僧正、(四三)

安然之師遍昭又遇智證大師受兩部灌頂云云
辛亥三 三九 九月十一日真然僧正入滅、八十歲、淨藏法師誕生、洛城人、父善清行、母嵯峨孫女也、(三九)

壬子四 撰新万葉集、唐昭宗景福元年也、

癸丑五 (小野) 道風誕生、

甲子六 十二月正僧都益信、權律師聖寶管法務、唐昭宗乾寧元年也、

乙卯七

丙辰八

丁巳九 七月十三日帝即位、

十六 醍醐天皇 宇多長子、母皇太后藤胤子、内大臣高藤女、十三歳受禪、治三十三年、延長八年九月廿九日崩、四十六歳、諱敦仁、

戊午昌泰 八月十六日乙卯改元、唐昭宗光化元年也、
(補注2)

己未二 (作乙) 十月十四日寬平法皇御出家、卅三歳、以益信為戒師、十一月廿四日於東大寺受戒、法名空理、
(宇多)

庚申三 三月円城寺益信任僧正、建立西西寺、十月寬平法皇高野山御幸、

叡山湯勝法師
化作仙人空中飛
辛酉延喜 七月十五日甲子改元、依辛酉并老人星也、唐昭宗天復元年、依藤時平之諷言、菅丞相流于大宰府、天滿天神是也、十二月寬平法皇於東寺受灌頂於益信僧正、

壬戌二 西西聖宝任僧正、

癸亥三 二月廿五日菅丞相於大宰府薨、五十九歳、空也上人誕生、延喜第二御子也、
(道真)

甲子四 三月寬平法皇於仁和寺構御室、又幸叡山千光院構御室、唐景宗天祐元年也、

乙丑五 正月西西天皇幸仁和寺、九月法皇金峯山御幸、四月十四日寬平法皇於叡山千光院受苦薩大戒於增命、古今集廿卷歌数千首大納言紀友則・實之・躬恒・惠岑書奏之、
(忠) (壬生)

丙寅六 三月七日益信僧正入滅、八十歳、六月廿五日菅丞相成火電飛于京中、

丁卯七 偽梁太祖即位開平元年

戊辰八

己巳九 七月六日聖寶僧正入滅、七十八歳、西西為官寺、

庚午十 九月寬平法皇稟山門灌頂於座主增命、

辛未十一 偽梁太祖乾化元年 元杲僧都誕生、
(忠)

壬申十二 九月三日慈惠誕生、姓木津氏、近州淺井郡人也、

癸酉十三

甲戌十四

乙亥十五 於安樂寺天神御社建立、偽梁太祖正明元年、(宋帝)二月三日叡山玄昭入滅、七十二歲、

丙子十六 寬朝僧正誕生、式部卿敦實親王御子也、

丁丑十七 自此年高野山中絶五圓年也、東大寺講堂三面僧坊百卅四間燒失、

戊子十八 十一月二日相應和尚入滅、八十八歲、天樂鄉音山中(三九)

己卯十九 般若寺觀賢僧正任西西座主、

庚辰二十

辛巳廿一 十月空海贈大師号、入定已後八十七年、依觀賢奏也、偽梁太祖龍徳元年(宋帝)

壬午廿二 嵯峨釋迦日本來、奮然法橋渡之、

癸未延長 閏正月十一日改元、依早・疫也、朱雀院誕生、三月菅丞相靈成怒、廿一日皇太子保明俄薨、(道長)

甲申二

乙酉三 六月十七日觀賢僧正入滅、七十三歲、此年任僧正、

丙戌四 村上天皇誕生、偽唐明宗即位天成元年

丁亥五 十二月三井智證大師号、入滅已後三十八年也、十二月十一日天台增命僧正入滅、八十五歲、勅諡靜觀、(向珍)

戊子六 七月十三日增利僧都入滅、七十二歲、性空上人誕生、十二月十三日西西延徹入滅、七十三歲、十二月十九日觀宿僧都入滅、八十五歲、

己丑七

庚子八 六月廿六日於清涼殿而為被殺大納言清貫右中弁希世等了、(備原)主上人之還常寧殿給云云、九月廿九日西西天皇崩、四十六歲、十一月廿一日帝即位、

一六 朱雀院 西西十一子、母皇太后藤穩子、基經女、廿八歲即位、治十六、天曆六年八月十五日崩、三十歲、諱寬明、

辛卯承平 四月廿六日甲子改元、佛後一千八百八十年也、七月十九日寬平法皇崩、六十五歲、(令也)

壬辰二 此年平將門謀叛、反東國、

癸巳三

甲午四 祇園社造立、偽唐閔帝應順元年、弘法大師入定已後一百年也、

乙未五 延曆寺中堂燒失、南都仲筭誕生、偽唐路王清泰元年

丙申六 偽晋高祖即位天福元年

丁酉七

戊戌天慶 五月廿三日改元、依厄運・地震也、(三九)

己亥二 (藤原)
此年純友謀叛、

庚子三 正月於横川勅淨藏修大威德秘法調伏、平將門无程首上落、
二月十四日將門依誅、平貞盛射之、十一月廿一日勅明達於住吉神
宮寺調伏、純友七月十四日申時日三出口也、

辛丑四 (藤原)
惠心僧都誕生、姓卜氏、和州葛城人也、

出帝即位 壬寅五 十一月廿五日勸修寺濟高僧都入滅、八十六歲、

癸卯六

甲辰七 偽晋出帝開運元年

乙巳八 叡山勸修誕生、姓紀氏、

丙午九

ムラカミ
村上天皇 六十 西酉十四子、母同上、廿二歲即位、廿一年、康保四年五月六日
崩、四十二歲、諱成明、号天曆帝、

丁未天曆 四月廿二日丁丑改元、佛後一千八百九十六年也、
偽漢高祖天福元年、六月九日天神始移北野、

戊申二 偽漢高祖乾祐元年

己酉三 (福説カ)
於興寺一和与祥延有維摩會講師相論、
九月廿九日陽成天皇崩、八十一歲、

庚戌四 冷泉院誕生、

辛亥五 後撰集廿卷歌數千四百廿首撰之、
偽周太祖即位廣順元年

壬子六 八月十五日朱雀院崩、三十歲、
高野山奧院御廟為雷火燒失、

癸丑七

甲寅八 濟信僧正誕生、一条左大臣雅信子也、
六月九日叡山禪喜入滅、八十二歲、偽周太祖顯德元年也、

乙卯九 小野仁海僧正誕生、三井慶祚誕生、

丙辰十

丁巳天德 十月廿七日庚辰改元、依水旱也、
和泉雅真公奧院御廟室形造也、

戊午二 (成)
円融院誕生、(注12)

己未三

庚申四 九月廿三日夜子尅内裏燒失、遷都以來百六十七年、神鏡飛在、
南都櫻上小野宮實賴默禱以衣袖受之云云、
趙宋太祖建隆元年

辛酉應和 二月十六日庚辰改元、依内裏燒失也、
仁和寺成典誕生、弘法大師後身也、

此御宇東大寺
法感受帝釈
勅喜見城説法
往談魔王宮見
亡母之生所云云

壬戌二

〔太〕
趙宋太祖乾德元
十一月廿一日淨感
入滅、七十四歲

癸亥三

八月於清涼殿啓法花講、五日召二十明德分朝夕二坐、南北互為講問、十二月廿四日慈念僧正入滅、八十五歲、

甲子康保

七月十日癸未改元、依早并甲子也、寬空任僧正、性空上人出家、卅六歲、往日向霧嶋、

乙丑二

天地開闢以來九千六億九十六萬一千九百八十二年也、

丙子三

〔良〕
慈惠僧正任天台座主、小野道風逝去、七十一歲、叡山大講堂・鐘樓・四王院・延命院・常行堂炎上、

丁卯四

花山院誕生、五月六日村上天皇崩、四十二歲、性空上人住筑前背振山、十一月十一日帝即位、

六十 冷泉院

村上三子、母皇后藤安子、師輔一女、十八歲受禪、治二年、寬弘八年十月廿四日崩、六十二歲、諱憲平、

戊辰安和

八月十三日癸亥改元、佛後一千九百十七年、趙宋太祖開寶元年也、

〔二一〕
正月三日南都
法藏入滅、

己巳二

南都仲筭於熊野那智瀧下講心經、忽現千手千眼之像、講已昇岩上、自此不見、九月廿三日帝即位、

六十 圓融院

村上五子、母同上、十一歲受禪、治十五年、正曆二年二月十二日崩、卅三歲、諱守平、法名金剛法、号円融法皇、寬朝入室也、

清明此御
宇之人也、

庚午天祿

三月廿五日丙子改元、佛後一千九百十九年也、

辛未二

三井明尊誕生、〔小野〕道風之孫、篁之曾孫也、大納言行成誕生、〔國一〕
〔藤原〕

壬申三

二月六日寬空僧正入滅、八十九歲、九月十一日空也上人入滅、七十歲、号光勝、住六波羅密寺、〔宇〕

癸酉天延

十二月廿二日庚子改元、依天變也、〔補注〕

甲戌二

乙亥三

七月一日日蝕、自辰時至未剋、如晴夜、九月大風

丙子貞元

七月十三日戊子改元、三条院誕生、* 趙宋太宗即位太平興國元年也、

丁丑二

天台之皇慶誕生、姓橘氏、性空之姪也、十月十一日西院寬靜僧正入滅、七十八歲、

戊子天元

四月十五日改元、依宋變也、〔補注〕叡山桓舜誕生、

己卯二

庚辰三

一条院誕生、

辛巳四

八月廣澤寬朝任僧正、

壬午五

癸未永觀

四月十五日庚子改元、依内裏燒亡也、東大寺齋然入宋、

甲申二

八月八日僧都元昊兼法務、大僧正良源、僧正寬朝、先管法務時有三法務、趙宋太宗雍熙元年也、〔藤原〕

六十 華山院

冷泉一子、母贈后懷子、伊尹一女、十八歲即位、治二年、寬弘五年二月八日崩、四十歲、諱師貞、法名人覺、

宮僧正覺源(和) 四月廿五日改元、正月三日慈惠大師入滅、七十四歲、此御子也、**乙酉寬知**(七九) 八月廿九日円融院從寬朝御出家、法名覺如、

七月廿二日 帝即位 **丙戌二** 二月廣澤寬朝任大僧正、六月廿二日夜花山院出内裏遁世、十九歲、法名入覺、後籠居熊野那智山、

六十一條院 圓融院長子、母皇后東三条院藤詮子、兼二女、七歲受禪、治廿五年、寬弘八年六月廿一日崩、卅二歲、諱懷仁、

春日大原野 松尾北野等 此御宇始 行幸、 **丁亥永延** 四月五日丁酉改元、佛後一千九百卅六年也、東大寺齋然飯朝、

戊子二 性空上人創幡州書寫山号圓教寺、趙宋太宗端拱元年(八二)

大江山鬼神 酒典童子 此時事也、 **己丑永祚** 八月丙辰改元、依彗星變也、八月大風、

庚子正曆 十一月戊子改元、依去年八月十二日大風也、趙宋太宗淳化元(九六) 三月円融院寬朝僧正為阿闍梨受灌頂、

辛卯二 二月十二日円融院崩、卅三歲、冬三井明尊任天台座主、慈覺門從不許、

壬辰三

癸巳四 八月慈覺・智證西門相爭、慶祚學門從移大雲寺、慈覺門從(徒)燒千手院為壞房舍四十余字、智證門徒一千人出山、

甲午五

趙宋太宗 至道元年 **乙未長德** 二月廿二日戊辰改元、依去年疫・旱也、二月廿七日元杲僧都入滅、八十二歲、

丙申二 拾遺集并短歌抄此年号之中撰之、花山院御自撰也云云、

丁酉三

戊戌四 六月十二日廣澤大僧正寬朝入滅、八十四歲、趙宋真宗咸平元年

己亥長保 正月十三日丁卯改元、依去年疾疫也、王元之作黃州竹樓記、

庚子二 高野山中絶第二度、自此年十五年荒、三河寂昭為源信使入宋、

辛丑三

壬子四

癸卯五

甲辰寬弘 七月廿日壬子改元、依宋變也、趙宋真宗景德元年

乙巳二

丙午三

丁未四 三月十三日性空上人入滅、八十歲、

戊申五 二月八日花山院崩、四十歲、後一条院誕生、七月八日天台勤修入滅、六十四歲、趙宋真宗泰中祥符元(天)

己酉六 六月請名德宮中講論取勝王經五日
廿一為每年式、後朱雀院誕生、

庚戌七 二月廿二日一条院崩、卅三歲、十月廿四日冷泉院崩、
六十二歲、高野山維範誕生、京兆人、十月十六日帝即位、
(六九)
(黑標)

辛亥八

六十三條院 冷泉二子、母贈皇太后藤超子、兼家一女、卅六歲受禪、治
五年、寬仁元年五月九日崩、四十二歲、諱居貞、

壬子長和 十二月廿五日戊子改元、佛後一千九百六十一年、
大御堂性信 此第四王子也
* * 十月廿五日勸修寺大僧正雅慶入滅、八十一歲、

癸丑二

甲子三

乙卯四

丙辰五 東大寺齋然法師入滅、
二月七日帝即位、

六十後一條院 一條二子、母皇太后上東門院、左大臣道長一女、九歲
受禪、治廿年、長元九年四月十七日崩、廿九歲、諱敦成、
(彰子)
(藤原)

丁巳寬仁 四月廿三日辛卯改元、五月九日三条院崩、四十三歲、
趙宋真宗 天喜元年
六月十日惠僧都入滅、七十六歲、成尊僧都誕生、
(龜)
(心脫)
(藤原)

戊午二 六月旱、小野仁海勅於神泉苑修請雨經法、
大雨下三日夜、十月僧正濟信加大、

己未三 十二月廿二日三井慶祚入滅、六十五歲、

庚申四 二月二日丁未改元、
高野明筭誕生、姓佐藤氏、紀州之人也、
(黑標ノ上ニ、朱線ヲ重ネル)

辛酉治安 趙宋真宗乾興元年
* *

壬戌二

癸亥三 趙宋仁宗即位大聖元年、義範誕生、
十二月僧正深覺加大、
(天)

甲子萬壽 七月十三日戊戌改元、甲子也、
* *

乙丑二 後冷泉院誕生、

丙子 正月大后上東門院出家
(藤原彰子)

丁卯四 十二月藤原道長薨、

戊辰長元 七月廿五日戊午改元、依早・疫也、
* * 五月廿六日天台之院源入滅、

己巳二

庚午三 六月十一日大僧正濟信入滅、七十七歲、

辛未四

壬申五 仁海勅於神泉苑修請雨經法、大雨三日降、
趙宋仁宗 明道元年
禪林寺永觀誕生、姓源氏、初学三論後修淨土行、

癸酉六

趙宋仁宗景祐元年 九月沙門教円任阿闍梨、以阿闍梨為官事、從是始也、後三条院誕生、弘法大師入定已後二百年也、

乙亥八

(蘇軾) 東坡生、 丙子九 四月十七日後一条院崩、廿八歲、七月十四日帝即位、

六十 後朱雀院 一条三子、母同上、廿八歲受禪、治九年、寬德二年二月十八日崩、卅七歲、先是御出家、于時東三條院也、諱敦良、

丁丑長曆 四月廿一日甲子改元、僧正範後誕生、佛後一千九百八十六年也、

戊子二 六月仁海・成典二師任僧正、仁海祈雨、有驗也、人呼為雨僧正、趙宋仁宗寶元元年

己卯三

庚辰長久 十一月十日辛巳改元、趙宋仁宗康定元年

辛巳二 三井明尊宣問園城寺戒壇立不於諸宗、趙宋仁宗慶曆元年

壬午三

癸未四 六月仁海勅於神泉苑祈雨、大雨下、三日夜許輦車、九月廿五日禪林寺大僧正深覺入滅、八十九歲、

甲申寬德 十月廿四日仁和寺成典入滅、八十四歲、十一月廿八日壬午改元、依旱・疫也、

乙酉二 三井明尊為園城寺長吏、

七 後冷泉院 後朱雀院一子、母尚侍贈正二位藤嬪子、道長六女、廿一歲受禪、治廿三年、治曆四年四月十九日崩、四十四歲、諱親仁、

丙戌永承 四月十四日甲子改元、五月十六日仁海僧正入滅、九十二歲、

丁亥二 二月十四日高野持經上人入滅、

戊子三 八月三井明尊遂仁天台座主、興福寺永緣誕生、姓藤氏、

己丑四 七月廿六日天台之皇慶入滅、七十三歲、趙宋仁宗皇祐元年

庚子五

辛卯六 釋迦如来滅後二千年、末法之始也、三月藤原頼通改宇治別業号平等院、(注13)

壬辰七 大極殿燒失、

癸巳天喜 正月十一日壬子改元、白河院誕生、

甲午二 九月廿日内州從聖德太子御廟掘出記文、(注14)滅後四百三十四年也、趙宋仁宗至和元年

乙未三 八月十三日夜東寺塔雷火燒、

丙申四 趙宋仁宗嘉祐元年

丁酉五 寬助僧正誕生、左中弁師賢息、勝覺僧正誕生、
左大臣俊房息、九月十日叡山桓舜入滅、八十歲、
(源)

戊戌康平 八月廿九日丁卯改元、依變異也、

己亥二

庚子三

辛丑四

壬子五

癸卯六 六月廿六日三井明尊入滅、九十三歲、
夜清水寺炎上、

甲辰七 趙宋英宗即位治平元年

乙巳治曆 七月十七日宮僧正
覺源入滅、六十六
八月二日己丑改元、六月十五日勅成尊於神泉苑、
* 一七日修祈雨法、第三日降雨、凡修中三度雨、

丙午二

丁未三

戊申四 四月十九日後冷泉院崩、四十四歲、
七月廿一日帝即位、趙宋神宗即位熙寧元年

後三條院 後朱雀三子、母皇太后須子、內親王三條院一女、陽明門院是也、
卅五歲受禪、治四年、延久五年五月七日崩、四十歲、諱尊仁、

己酉延久 四月十三日己酉改元、

庚戌二 東大寺大佛頭遍身汗流出、

辛亥三 十月四日祇園社炎上、(注15)

壬子四 十二月廿九日
帝即位 大原良忍上人誕生、尾州富田人、問台教於良賀稟
灌頂於永意、安禪寺宗意誕生、嚴覺之甥也、
(藤原)

白河院 後三條院皇子、母皇太后贈大政大臣權大納言能信女、卅歲受禪、
治十四年、大治四年七月七日崩、七十七歲、諱貞仁、永長元年御出家、

癸丑五 高野御堂
覺法親王 五月七日後三條院崩、四十歲、
或云此年承保元年云云、

甲子承保 花藏院聖惠親
王此王子也、 八月三日戊子改元、(補注1) 定海僧正誕生、
* 或二、正月七日成尊僧都入滅、五十九歲、

乙卯二 或三、

丙辰三 八月朔日勅性信仁和寺北院為官寺、
或四、

丁巳承曆 十一月十七日甲寅改元、依炮瘡也、
(龜)

戊午二 趙宋神宗
元豐元年 皇后妊過期無產、勅義範修孔雀明王秘法、即皇子
平誕生、堀河院是也、十月十六日修大乘會、法勝寺天皇幸、

己未三 伊勢大神宮燒失、

庚申四

多武峯為
興福寺燒、**辛酉永保** 二月十日辛卯改元、依辛酉、
六月九日三井寺為山徒燒、

(蘇軾)
東坡再遊赤
壁作賦
壬戌二 勅小野範俊修請兩經法、依西西義範靈加持力不降
甘雨、經二七日無驗、依之範俊籠居熊野那智山、

癸亥三 二月仁和寺性信叙二品、僧位自性信始也、
金剛王院聖賢誕生、

甲子應德 二月七日丙子改元、依甲子也、
* 七月三井宗範入滅、九月僧正信覺入滅、

乙丑二 九月廿七日長和親王性信入滅、八十一歲、弘法大師後身也、
後拾遺集奏之、通綱書之、
(藤原)

丙寅三 趙宋哲宗即位元祐元年、司馬溫公卒、
十二月十九日帝即位、
(司馬光)

七十 **堀河院** 白河第二子、母中宮藤賢子、開白左大臣女、實右大臣頭房女、
八歲受禪、治廿一年、喜承二年七月十九日崩、廿九歲、諱善仁、
(藤原師夷)

花藏院寬曉
此王子也、
丁卯寬治 四月七日改元、

十月叡山
御幸、
戊辰二 二月白河院高野御幸、取路南都礼東大・興福仏、
十月五日西義範僧都入滅、六十六歲、
(西)

己巳三 五月上皇在中堂一七日、
十二月上皇近州彦根山御幸、

庚午四 十月天皇清水寺行幸、宿一七日、

辛未五 二月太上皇高野山御幸、
(白河)

壬申六 七月太皇金峯山御幸、
(白河)

(七院)
癸酉 兼海上人誕生、

趙宋哲宗
紹聖元年
甲戌喜保 十二月十五日壬子改元、元海僧都誕生、
七月高野山不斷經始行之、覺法親王御願也、

乙亥二 覺鑣上人誕生、肥前藤津人也、
熊野本宮炎上、興福寺炎上、

(白河)
八月上皇出家
十月受沙弥戒
丙子永長 十二月十七日癸酉改元、天下不静并咆瘡也、
二月三日高野維範入滅、八十六歲、平忠盛誕生、

丁丑承德 十一月廿一日辛未改元、依天變・地震也、

戊寅 趙宋哲宗元年、信證僧正誕生、
七月廿一日帝幸法勝寺礼佛、

己卯康和 八月廿八日戊戌改元、同上正月仁和寺覺行由親王、
出家後為親王自覺行始、俗曰法親王、
(?)

庚辰二

辛巳三 趙宋徽宗即位建中靖國元年、東坡卒、六十六歲、
(蘇軾)

(寧)
同崇寬
元年
壬午四 七月廿一日尊勝寺供養、導師覺行法親王、

癸未五 正月十六日鳥羽院誕生、此三箇年元攝政開白云云、
七月十三日供養金書大藏經於法勝寺

甲申長治 二月十日改元、三月廿四日講灌頂院、于尊勝寺
* 修結縁灌頂、仁和寺覺行為大阿闍梨、

(黃庭堅)
黃山谷卒
九月晦日
乙酉二 北陸道紅雪降、厚五寸五分、
十一月七日源親元死去、六十八歲、

丙戌嘉承 四月九日改元、依彗星也、
* * 十一月十一日高野明算入滅、八十六歲、

丁亥二 趙宋徽宗大觀元年
七月十九日堀河院崩、廿九歲、十二月一日帝即位、

七十 鳥羽院 堀河太子、母贈皇太后藤茂子、故大納言實季女、五歲受禪、
治十六年、保元々々年七月崩、五十四歲、諱宗仁、法名空覺、

紫金盃
御室覺性
親王此王子也、
戊子天仁 八月廿七日庚辰改元、
佛後二千五十七年、

己丑二 正月小野範俊任僧正、
二月五日平時範薨、五十六歲、

五月天皇幸
法勝寺、
庚子天永 七月十三日庚戌改元、依彗星并世間不靜也、
* 覺鑣上人出家、十六歲、

趙宋徽宗
政和元年
辛卯二 五月十一日上皇慶讚金書大藏經于法勝寺、
十一月二日禪林寺永觀入滅、八十歲、

壬辰三 四月廿四日鳥羽僧正範俊入滅、七十六歲、号小野權僧正、
六月早、酉酉勝覺勅神泉苑修祈雨法、過三日大雨降、

癸巳永久 七月十三日庚戌改元、依兵革并疫病也、
四月叡山与興福入宗都爭相從、

甲午二 自八月十七日天如鼓音鳴事七日不絕、

乙未三

丙申四 夏大旱、依勅酉酉勝覺僧正於神泉苑修請雨
經法、第四日大雨降、

丁酉五

平清盛誕生
戊戌元永 四月四日乙卯改元、九月七日白河院幸熊野山、
* 慶讚大藏經于神祠、上皇幸熊野、已三面、

己亥 趙宋徽宗宣和元
崇徳院誕生、 理性院宗命誕生、

庚子保安 四月十日改元、

辛丑二 潤五月二日叡山徒燒園城寺、十一月源俊房薨、
覺鑣上人受灌頂、廿七歲、

壬寅三 十二月置灌頂院于叡勝寺、

癸卯四 日吉輿入洛、
二月十九日帝即位、

七十 崇徳院 鳥羽第一皇子、母中宮璋子、故大納言公實女、待賢門院、白川院
御養子、五歲即位、治十八年、追而為讚岐院崩、四十六歲、諱顯仁、

西山宮法師
无性此王子也
甲辰天治 四月五日壬子改元、十月太上皇高野山御幸、
金葉集十卷歌數六百四十九首撰之、

乙巳二 正月十五日大僧正寬助入滅、六十九歲、
四月五日興福寺永縁入滅、七十八歲、

丙午大治 正月廿二日改元、
* 趙宋欽宗即位靖康元年

丁未二 高野山僧法院建立、十月白河・鳥羽院兩太皇高野山御幸、
南渡高宗即位建炎元年、後白河院誕生、

戊申三 三月建圓勝寺、
十月慶讚大藏經于石清水、太上皇幸之、

己酉四 四月一日三寶院權僧正勝覺入滅、七十三歳、
七月七日白河院崩、七十七歳、

近衛院 鳥羽第六王子、母中納言長女、毘福門院、三歳即位、治十四年、
久壽二年七月廿三日崩、十七日歳、諱躰仁、
(父(母)子)

庚戌五 十月廿五日法金剛院供養、導師仁和寺覺行法親王、
覺性親王誕生、
正乙

壬戌康治 四月廿八日改元、
* 四月八日信證僧正入滅、四十五歳、

辛亥天承 二月廿九日改元、趙宋高宗紹興元年
* 七月置八講于法勝寺、
天下大飢饉

癸亥二 五月十一日鳥羽院東大寺受戒、同十二日叡山受戒、(注16)
二条院誕生、十二月十二日覺鑾上人入滅、四十九歳、
八月六日 介勝院供養

壬子長承 八月十一日改元、二月一日大原良忍上人入滅、六十一歳、
* *

甲子天養 二月廿三日改元、詞花十卷歌数四百九首三位頭輔撰之、
十月廿八日藤原敦光薨、八十二歳、
(藤原)

癸丑二 四月八日法念上人誕生、号源空、

乙丑久安 七月廿二日改元、
六月仁王會百座修于得長壽院、

甲寅三 二月慶讚金書大藏經于法勝寺、
弘法大師入定已後三百年也、

丙寅二 二月平實親王、

乙卯保延 四月廿七日改元、

丁卯三 正月四日介王院聖賢入滅、六十五歳、五月十九日安祥寺宗意
六月廿四日大傳法院衆還任高野山、平宗盛誕生、
六月十七日鳥羽院崇徳院而上皇叡山御幸、源頼朝誕生、
入滅、七十八歳、

丙辰二 三月廿三日鳥羽勝光明院供養、太皇幸之、
上

戊辰四 四月十二日定海大僧正入滅、七十六歳、祇園社焼亡、

丁巳三 正月定海任僧正、二月玄覺任僧正、平重盛誕生、
十月十九日鳥羽安樂壽院供養、導師仁和寺覺行、
(鳥羽) 幸法性寺、

己巳五 五月十二日依雷火高野山大塔金堂焼失、同七月九日大
塔作事始、平清盛奉行之、

戊午四 九月太上皇中堂宿一七日、勝賢僧正誕生、
十一月定海任大僧正、西西徒大号定海為初、
日吉神與 入洛

庚午六 七月八日高野金堂供養、導師寬遍、号尊壽院、

己未五 五月十八日近衛院誕生、七月大洪水、
八月四日善為康卒、九十一歳、
(三善)

辛未仁平 正月廿六日改元、佛後二千一百年、
* 八月十四日永嚴法印入滅、七十七歳、

庚申六 潤五月廿五日山從燒三井寺、十二月八日金剛峯寺衆
從乱入密嚴院、妨覺鑾上人入定、七百余人離山、
(潤) (從)

壬申二

辛酉永治 七月十日改元、三月十日鳥羽上皇御出家、次信證
僧正為受戒師、十二月廿七日帝即位、
四月廿日日光國師 誕生、姓賀陽氏 (宋西)

癸酉三

二月慶讚金書大藏經于熊野山、正月十五日平忠盛死去、五十八歲守覺親王誕生、十二月六日覺法親王入滅、六十三歲、

(貞應)
解脫上人誕生、
右少弁貞憲息
(藤原)

甲戌久壽

八月九日改元、同日金剛心院建立供養、五月晦日兼海上人入滅、六十二歲、

乙亥二

七月廿三日帝即位、近衛院崩、十七歲、十月廿六日帝即位、(注17)

七十 後白河院

鳥羽第四皇子、母待賢門院、廿九歲即位、治三年、建久三年三月十三日崩、六十六歲、諱雅仁、嘉應元年御出家、法名行真、

喜多院御室
守覺法親王
光明壽院云云
道助親王
兄弟此王子也、

丙子保元

四月廿七日改元、七月二日鳥羽院崩、五十四歲、*崇徳院与後白河院兵乱、八月十八日元海入滅、六十三歲

丁丑二

戊寅三

正月天皇幸法勝寺、十二月一日帝即位、

七十二條院

後白河第一皇子、母大納言藤經實女、十六歲即位、治七十、永萬元年七月廿七日崩、廿三歲、諱守仁、

己卯平治

四月廿日改元、*

庚辰永曆

正月十日改元、正月四日源義朝被誅、三月賴朝流于伊豆、二月廿四日實運僧都入滅、五十歲

辛巳應保

九月四日改元、高倉院誕生、*

壬午二

成賢僧正誕生、

癸未長寬

三月廿九日改元、趙宋孝宗即位隆興元年、六月九日叡山衆燒三井寺、

甲申二

二月廿二日勅興福寺衆、於東大寺會万人沙門讀壽命經、六條院誕生、八月廿六日讚岐院崩、四十六歲、(宗徳)

乙酉永萬

六月五日改元、七月廿七日二條院崩、廿三歲、額打輪、八月九日清水寺為山從徒燒、七月廿六日帝即位、六月晦日忍辱山寬遍僧正入滅、六十七歲、(注18)

七十六條院

二條一子、母大藏少輔伊岐善盛女、其品賤而不及贈位、二歲受禪、治三年、安元二年七月十七日崩、十三歲、諱順仁、

丙戌仁安

八月廿七日改元、

丁亥二

天台沙門明雲任僧正、

戊子

四月千光國師入宋、九月皈朝、正月十一日修正取中金剛峯寺之衆乱入傳法院堂内、狼藉悉離、(宗徳)

十八高倉院

後白河第三子、母皇太后贈左大臣平時信女、堅春門院、八歲即位、治十二年、治承五年正月廿日崩、廿一歲、諱憲仁、(徳)

己丑嘉應

四月八日改元、六月七日一院御出家、法名行真、十二月十一日覺性親王入滅、四十一歲、

庚寅二

四月廿一日後白河院受戒于東大寺、(三九)

辛卯承安

四月廿一日改元、正月五高倉院御元服、七月十日理性院宗命入滅、五十二歲、*

壬辰二

三月沙門公顯任僧正、十月十五日平清盛於福原營道場修法華、後白河法皇為大阿闍梨、

癸巳三 平清盛築兵庫嶋、明恵上人誕生、

甲午四 趙宋孝宗淳熙元年

乙未安元 七月廿八日改元、

丙申二 七月十七日六条院崩、十三歳、七月廿七日法皇受戒于延曆寺、實賢僧正誕生、

丁酉治承 八月四日改元、四月十三日日吉神輿入洛、
* 五月座主明雲僧正配流于伊豆、

戊戌二 安徳天皇誕生、

己亥三 後鳥羽院誕生、八月一日平重盛死去、四十三歳、
十二月廿八日東大寺興福寺一時焼亡、三月十八日流人俊寛僧都死去、

高倉院宮 御謀叛 庚子四 六月二日移都於福原、同十一月還舊都、
(四九) 三月廿二日帝即位、

八十 安徳天皇 高倉第一子、母中宮徳子、入道前大政大臣平清盛女、建礼門院、
三歳即位、治三年、元暦二年三月廿四日於西海長門崩、八歳、諱言仁、

辛丑養和 七月十四日改元、正月廿二日高倉院崩、廿一歳、
潤二月四日平清盛死去、六十四歳、法名浄海、
(五九)

壬寅壽永 四月廿七日改元、

癸卯二 七月廿六日帝即位、七月廿五日平家一門没落西海、

八十 後鳥羽院 号隱岐院 高倉第四子、母修理太夫藤原信隆卿女、六歳即位、治十五年、延應元年二月廿二日於隱岐国崩、六十歳、諱尊成、

光嚴御堂 道助親王 此王子也 甲辰元暦 四月十六日改元、正月廿一日木曾義仲打死、
高野山道範誕生、泉州人也、

乙巳文治 八月十四日改元、三月廿四日安徳天皇入海中、
五月十四日安祥寺實嚴入滅、五十五歳、六月廿三日平宗盛
* 被誅、卅九歳、

丙午二 解脫上人卅三歳勤維摩會講師、
(貞應)

(藤原) 俊成卿 撰千載集 丁未三 千光国師四十七歳重入宋謁虚菴、
(保徳) 八月廿二日後白河法皇於天王寺五智光院受灌頂於公頭、
(藤原) 奥州秀衡入道死去、(注19)浄妙寺了然誕生、京兆人也、

戊申四 源義經奥州於衣川被許、
(保徳)

己酉五 源義經奥州於衣川被許、

庚戌建久 四月十四日改元、趙宋光宗即位紹熙元年
(二九)

辛亥二 千光国師皈依、弘通禪宗於和国筑前、建聖福寺、千
光号榮西又号明菴、備中吉備津宮人也、

壬子三 三月十三日俊白河法皇崩、六十六歳、憲深僧正誕生、
解脫上人卅九歳遁世、居笠置寺、
(後)

癸丑四 五月廿八日曾我兄弟作乱被誅、

甲寅五

趙宋寧宗
即位慶元年

乙卯六

三月十一日東大寺再興、造位供養、道師覺憲僧正、呪願西
勝憲僧正、同日天皇南都行幸、源賴朝嚴兵衛、
土御門院誕生、嶋津判官忠久薩下向、

丙辰七

六月廿二日勝賢僧正入滅、五十九歲、
道助親王誕生、後鳥羽院第二王子也、

丁巳八

順德院誕生、

戊午九

三月三日帝即位、

八十 土御門院

後鳥羽第一子、母内大臣源通親公女、承明院、四歲即位、治
十二年、寬喜三年十月十一日於阿波國崩、卅七歲、諱為仁、

己未正治

四月廿七日改元、正月十三日源賴朝死去、五十三歲、

道教僧都誕生
大納言雅親息

庚申二

永平道元和尚誕生、姓源氏、京兆人、始謁建仁明菴、受禪
後入宋朝、值天童和淨禪師、付以曹洞宗旨皈朝、

趙宋寧宗
嘉元年

辛酉建仁

二月十三日改元、西大寺興正寺誕生、号叡尊、
始建仁寺、開山千光國師、

壬戌二

十月十五日聖一國師誕生、姓平氏、駿川人、字内爾、又号弁内、
八月廿五日守覺二品親王、五十歲、

癸亥三

甲子元久

二月廿日甲子改元、

趙宋寧宗
開禧元年

乙丑二

建仁寺為官寺、三月廿六日新古今廿卷歌数千九百七
十八首撰奏之、通具・有家・定家・家隆・雅經作也、

丙寅建永

四月廿七日改元、
道深二品親王誕生、後高倉院御子也、

丁卯承元

十月廿五日改元、
* 由良覺心誕生、姓常澄氏、信州神林懸人也、

戊辰二

趙宋寧宗嘉定元年

己巳三

實深僧正誕生、

庚午四

十二月廿八日帝即位、

八十 順德院

後鳥羽第三子、母贈左大臣範季卿女、修明門院、十四歲受禪、
治十一年、仁治三年九月十二日於佐渡國崩、四十六歲、諱守成、

辛未建曆

四月九日改元、

壬申二

東福寺普門誕生、諱劬人、号无開、又号大明國師、
後堀河院誕生、正月廿五日源空上人入滅、八十歲、

癸酉建保

十二月改元、二月三日解脫上人入滅、六十歲、
開田准后法助誕生、光明峯寺入道殿下息、

甲戌二

四月十六日山從衆燒三井寺、
十一月廿一日道法二品親王入滅、四十九歲、

乙亥三

七月五日千光國師入滅、七十五歲、

丙子四

丁丑五

戊寅六 廢帝誕生、

己卯承久 四月十二日改元、

庚辰二 後嵯峨院誕生、

辛巳三 四月廿日廢帝受禪、无即位儀、七月九日廢之、
天下兵乱、後鳥羽・土御門・順德院三人被流于三處、

五十八 九條廢帝 順德院第二子、治不足一年、故五代无定也、
文曆元年五月廿日崩、十七歲、諱懷成、

六十 後堀河院 後高倉法皇第三子、母故入道中納言基家女、十歲
即位、十一年、文曆元年八月六日崩、廿三歲、諱茂仁、

壬午貞應 四月十三日改元、
* * 永平道元和尚入宋、廿三歲(注20)

癸未二

甲申元仁 十一月廿日改元、

乙酉嘉祿 四月廿日改元、趙宋理宗即位寶慶元年

丙戌二 宋国祖(無字)元誕生、姓許氏、母陳氏、佛鑑(無準師範)禪師之弟子、号佛光
禪師、中性院元祖賴瑜法印誕生、紀州山崎在人也、

丁亥安貞 十二月十日改元、依赤斑瘡也、
* * 道元和尚廿八歲皈朝、建永平寺、

戊子二 趙宋理宗紹定元年

己丑寬喜 三月五日改元、

庚寅二 八月八日大風、天下飢饉、

辛卯三 九月十九日成賢僧正入滅、七十歲、
十月十一日土御門院於阿波国崩、卅七歲、

壬辰貞永 四月二日改元、正月十五日明惠上人入滅、六十歲、
* * 十二月五日帝即位、新勅撰廿卷撰之、定家奏之、

七十八 四條院 後堀河院第一子、母入道前開白道家女、二歲即位、治十年、
諱秀仁、仁治三年正月九日崩、十二歲、

癸巳天福 四月十五日改元、東福寺順空誕生、姓源氏、号藏山、

弘法大師入定 已後四百年
甲午文曆 十二月五日改元、五月廿日九條廢帝崩、十七歲、
* * 八月六日後堀河院崩、廿三歲、趙宋理宗端平元年

乙未嘉禎 九月十五日改元、聖二國師入宋、卅四歲、

丙申二 五月廿六日道教僧都入、三十七歲、

丁酉三 趙宋理宗嘉熙元年

戊戌曆仁 十一月九日改元、

己亥延應 二月七日改元、
二月廿二日後鳥羽院於隱岐國崩、六十歲、

庚子仁治 二月九日改元、高野山傳法院回祿、依裳切騒動也、
自此四十七年之間再興、又弘安年中没落、

辛丑二 趙宋理宗淳祐元年、佛國禪師誕生、(高野山) 聖一國師皈依朝、四十歲、在宋七年、

壬寅三 正月九日四條院崩、十二歲、九月十二日順德院於佐渡國崩、四十六歲、

八十 後嵯峨院 土御門院子、母宰相中將贈左大臣女、廿三歲即位、治四年、諱邦仁、文永九年二月十七日崩、五十三歲、

中御室 性助親王 此御子也 癸卯寬元 二月廿六日改元、後深草天皇誕生、

甲辰二

乙巳三 南禪寺德儉誕生、相州人、大覺禪師養育為弟子、(南漢) (衡漢道隆)

丙午四 宋國道隆來朝、入都寓泉涌寺之來迎院、西明寺殿崇敬、居常樂寺、後諡賜大覺禪師、本朝禪師号始于道隆、(西園寺) (北條時賴)

八十 後深草院 後嵯峨第一子、母入道大政大臣實氏女、四歲即位、治十三年、諱久仁、嘉元二年七月六日崩、六十二歲、(十六乙)

高麗御室 性仁一品親 壬此御子也 丁未寶治 二月廿八日改元、九月廿六日長樂寺榮朝入滅、建仁開山弟子也、(三浦) (三浦)

戊申 龜山院誕生、內裏炎上、六月五日泰時合戰、二月十八日改元、正月十五日道助親王入滅、五十四歲、(注21)

己酉建長 七月廿八日道深二品親王入滅、四十四歲、九月四日實賢僧正入滅、七十四歲、由良覺心入宋、四十三歲、(無本)

庚戌二 建立建長寺、

辛亥三 十二月十五日續後撰廿卷歌数千三百七十四首大納言為家卿奏之、(藤原)

壬子四 五月廿二日高野山正智院道範入滅、六十九歲、天下大飢饉、米一舛百文、

癸丑五 八月廿八日永平道元和尚入滅、五十四歲、趙宋理宗寶祐元年

甲寅六 由良覺心皈依朝、四十八歲、隱高野之故居、宋六年

乙卯七

丙辰康元 十月五日改元、

丁巳正嘉 三月十四日改元、

戊午正元 (マ) 淨妙寺了然入滅、七十一歲、号月峯、大覺禪師弟子也、

己未正元 三月廿六日改元、趙宋理宗開慶元年

十九 龜山院 後嵯峨第二子、母同上、十二歲即位、治十五年、諱恒仁、嘉元三年九月十五日崩、五十七歲、

遍智院宮 聖靈親王 此御子也 庚申文應 四月十三日改元、趙宋理宗景定元年 宋國普寧來朝、西明寺殿皈依、(元應) (北條時賴)

辛酉弘長

壬戌二

叡山衆徒 燒三井寺 癸亥三 九月六日西西報恩院憲深僧正入滅、七十三歲、十一月廿二日平時賴死去、号西明寺殿、(北條)

甲子文永 二月廿八日改元、根来寺良殿僧都誕生、蒙古使来、

乙丑二 伏見院 趙宋度宗即位咸淳元年、宋國普寧飯末國、誕生 五月二日山門衆徒燒三井寺、

丙寅三 續古今廿卷撰之、為家・行家・光俊奏之、(注22)

丁卯四 (宋徽)

戊辰五

己巳六 (大休) 宋國正念來朝、初住相陽建長寺、次移禪興・壽福・円覚、

庚午七 十一月廿六日開田准后法助入滅、五十八歳、

辛未八 十一月於根来寺円明寺請仁和寺二位法印經瑜被行傳法灌頂、授者中納言僧都、

壬申九 二月十七日後嵯峨院崩、五十三歳、蒙古伐國、中性院頼淳法印誕生、

癸酉十

甲戌十一 十月三日蒙古襲来、對馬合戦、

九十 後宇多天皇 龜山太子、母皇后京極院藤原左大臣實雄女、八歳即位、治十三年、正中元年六月廿五日崩、五十八歳、講世仁、法名金剛性、延慶元年於東寺灌頂堂仁和寺真光院禪助為大阿闍梨授法色衆八十二口其外西寺

乙亥建治 四月廿五日改元、趙宋恭宗即位德祐元年、高尾御室性仁誕生、後深草院王子女、夢窓国師誕生、(殊也)

丙子二 端宗即位景炎元年

丁丑三 九月六日西實深僧正入滅、六十九歳、太元世祖元年、(注23) 興福寺金堂以下四面佛間等為龍火燒、

戊寅弘安 二月廿九日改元、四月十六日虎闕誕生、續拾遺集撰之、七月廿四日大覚禪師入滅、宋國之道隆是也、(師秘)

己卯二 (無字祖元) 佛光禪師自宋國着太宰府、是偏依八幡勸也、長谷寺炎上、觀音頂上佛并右邊二面計取出也、(東福寺)

庚辰三 十月十六日慧日山弁円入滅、七十九歳、諡聖一國師、(円應)

辛巳四 蒙古来于對馬、差博多、逢大風、船數万艘破損、八月八日三聖寺湛然入滅、諡寶覺禪師、(北条)

壬午五 平時宗建円覚寺、請佛光為開山、時宗者西明寺殿子也、十二月十九日性助親王入滅、卅六歳、蓮花院頼豪誕生、(時頼)

癸未六

甲申七

乙酉八 後二条院誕生、

丙戌九 九月三日宋國祖元入滅、六十一歳、佛光禪師是也、高野山傳法院合戦下根来寺、自此無飯山、(無字)

丁亥十 十月廿二日伏見院受禪、(尊七)

九十 伏見院 後深草第一子、玄輝門院、廿四歳即位、治十年、文保元年九月三日崩、五十三歳、号持明院、

常瑜伽院御
室寬性親王

戊子正應 四月廿八日改元、後伏見院誕生、

青蓮院入道
二品親王

己丑二 十一月晦日宋國正念入滅、(大本)諡佛源禪師、住建長寺、
後西酉天皇誕生、

東南院聖珍
二品親王此王子也

庚寅三 八月廿五日西大寺興正菩薩入滅、九十歲、
(數傳)

辛卯四 十二月十二日大明國師入滅、八十歲、諡佛心禪師、
(無開當門)

壬辰五

癸巳永仁 十月廿七日改元、

甲午二

乙未三 趙宋成宗即位元貞元年

丙申四

丁酉五 十二月廿五日東福寺慧曉入滅、(白雲)諡佛照禪師、
趙宋成宗大德元年、花蘭院誕生、

戊戌六 十月十三日由良開山覺心入滅、九十二歲、諡法燈國師、
十月十三日帝即位、(無本)

九十 後伏見院 伏見院第一子、母准三宮藤原經子、參議藤原經氏卿
女、大政臣實兼猶子、永福門院是也、十一歲即位、治三年、
(西園)

己亥正安 四月廿五日改元、宋國子曇來朝、居円覺寺、
中性院增喜法印誕生、一山國師來朝、
(二尊)

庚子二

辛丑三

九十 後二條院 後宇多第一子、母源基多子、(船山)內大臣具守、西苑門院、
十七歲即位、治六年、延慶元年崩、廿四歲、
(女脱カ)
(一尊)

壬寅乾元 十一月廿三日改元、
(ケ)
(二九)

癸卯嘉元 八月五日改元、
新後撰歌數千六百二首、前大納言(二條)撰之、為世卿

甲辰二 正月一日中性院賴瑜法印入滅、七十九歲、
七月十六日後深草院崩、六十二歲、

乙巳三 九月十五日龜山院崩、五十七歲、(龜)尊氏誕生、
(定利)

丙午德治 十二月十四日改元、
十一月廿八日宋國子曇入滅、諡大通禪師、

丁未二

九十 花蘭院 伏見院第二子、母藤原左大臣實雄女、(洞院)顯親門院、十一
歲即位、治十一年、貞和四年十一月十一日崩、五十二歲、諱富仁、
(園)

後二條院 崩、廿四歲
戊申延慶 十月九日改元、趙宋武宗即位至大元年、
五月九日東福寺順空入滅、七十六歲、(破山)諡円鑑禪師、

己酉 正月八日禪興寺道海入滅、号桑田、(種)幡州之人也、
中性院聖憲僧都誕生、

庚戌三 大風、大飢饉、

辛亥應長 四月廿七日改元、^(八七)
五月十六日円覚寺昭元入滅、遺骨悉成舍利、^(無卷)

壬子正和 三月廿日改元、趙宋仁即位皇慶元年、^(宗統)
玉葉集廿卷撰之、為兼卿奏之、

癸丑二 四月二日南禪寺祖円入滅、信州之人、佛光之弟子也、^(無字祖元)

甲寅三 趙宋仁宗延祐元年、千光國師年忌、^(宋四)

乙卯四

丙辰五 佛國禪師入滅、中性院良番誕生、^(高峰頼日)

丁巳文保 二月三日改元、九月三日伏見院崩、五十三歳、
十月廿五日一山國師入滅、七十一歳、^(二卷)

戊午二 續千載歌数千三百四十四首、前大納言為世卿撰之、
二月七日東福寺炎上、

注

(1) 『皇年代略記』(群書類従卷三二、刊本三輯)、『本朝皇胤紹運
録』(群書類従卷六〇、刊本五輯)、『皇代略記』(統群書類従卷八
二、刊本四輯上)、『十三代要略』(統群書類従卷八五四、刊本二
九輯上)、『東寺王代記』(統群書類従卷八五六、刊本二九輯下)、
『武家年代記』(増補統史料大成五一) など参照。

(2) 例えば、その始めは「偽梁太祖温」(丁卯、九〇七年)とあり、
終りは「偽周恭帝崇訓」(己未、九五九年)とある(後掲「図3」
参照)。

(3) なお本書『日本帝皇年代記』において、北宋と南宋の変わり
目には「趙宋」を「南渡」の表記があると気付く。即ち大治元年
(丙午、一一二六)欄に「趙宋欽宗即位靖康元年」とあるが(欽
宗は北宋最後の皇帝)、翌二年(丁未、一一二七)欄には「南渡
高宗即位建炎元年」と見える(高宗は南宋初代)。しかし、早く
も天承元年(辛亥、一一三一年)欄には「趙宋高宗紹興元年」と
見え、「趙宋」に戻っている。

(4) 『和漢年代記』においては、早く北宋期に「宋」と表記された
箇所も見え、北宋と南宋の変わり目には「宋」を「南宋」の表記
があるが、その後は「宋」と表記されている。即ちその丙子一
九七六年の欄に「宋太宗昚 太平興國元」と見え(太宗は北宋二代)、
丙午一一二六年の欄に「宋欽宗桓 靖康元」とあり、翌年(丁
未、一一二七)の欄に「南宋高宗構 建炎元」とあるが(中巻)、
やがて癸未一一六三年の欄には「宋孝宗昚、隆興元」(孝宗は
南宋二代)とある(下巻)。

(5) 本書に見える天台僧で、生没記事のある最後のものは明尊
(園城寺長吏、天台座主。天禄二一九七一生、康平六一〇六三
没)だといえる(生・没記事兼備で、天台僧として没年が最後)。

(6) 因みに本書『日本帝皇年代記』において、釈迦の生没につい
て最初に触れたのは、地神の「第五彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊」項
に「甲寅周昭王二十六年、此年釈迦如来誕生、周穆王五十三年壬
申釈迦入滅也」と見える箇所である(前回119ページ)。

『帝王編年記』巻二においても、周昭王の項に「周紀曰、二十
六年甲寅四月八日仏生」、次の穆王の項で「仏涅槃」について
「当穆王五十四年、或五十二年、或五十三年、壬申歳二月十五日
也」とあって、本書の記事と生没年と同様だといえる。

また本書『日本帝皇年代記』には、その後も“仏(滅)後〇年”の記事が散見される。この「釈迦如来滅後二千年」(永承六、一〇五一)に至るまでについて見るに、先ず神武(一)と継体(二十七)は、各天皇の即位年が“仏(滅)後〇年”に当たるかを記し、その後は、“釈迦入滅一千四百七十二年”(癸卯、五二三年)、“仏後一千五百年”(辛未、五五一年)、“仏後一千九百八十六年”(長暦元、丁丑、一〇三七)などと、いわば端数の年忌が十箇所あまり見える。

(7) なお『和漢年代記』は、釈迦の誕生と入滅の記事は本書『日本帝皇年代記』(ないし『帝王編年記』)と同様だが、“仏入滅百年”(周厲王 前八七八―八二八、亥の年)、“仏滅二百年”(周平王 前七七〇―七二〇、卯の年)などと、年忌の表記は全て百年単位である。そして“仏滅千五百年”(辛未、五五一年)、“仏滅二千年”(辛卯、一〇五一年)に至るが、いずれも本書『日本帝皇年代記』の場合と同年である。

(8) 『国史大辞典』(吉川弘文館) 9の「勅撰和歌集」項、『和歌大辞典』(明治書院) 参照。

(9) 今回(中)収録分は『続千載和歌集』関係の記事―文保二年、一三二一―一三二五―までは『続後拾遺和歌集』関係の記事―正中二年、一三二五―からは次回収録となる。

(10) この行(「弘法之姓〇七十六歳」)は、前年(乙未、弘仁六、八一五)のことで、右に寄せた方がよい。

(11) この「唐僖宗文徳元年也」とは、実は翌年(戊申、仁和四、八八八)に当たる。

(12) この「円融院誕生」は、翌年(己未、天徳三、九五九)のこと、左に寄せた方がよいだろう。

(13) この二行―「釈迦如来〇末法之始也」「三月〇平等院」―は、一般には翌年(壬辰、永承七、一〇五二)のことだと見られている(扶桑略記)。翌年に移した方がよいかもしくない。

(14) この「九月廿日〇掘出記文」は、一般には前年(癸巳、天喜元、一〇五三)のことだといわれる(僧綱補任)。

(15) この「十月〇祇園社炎上」は、一般には前年(庚戌、延久二、一〇七〇)のことだといわれる(扶桑略記)。右に寄せた方がよからう。

(16) この行―「五月〇叡山受戒」―は、一般には前年(壬戌、康治元、一一四二)のことだといわれる(本朝世紀)。右に寄せた方がよからう。

(17) ここ(乙亥、久寿二、一一五五)に「七月廿三日帝即位」とあるが、厳密に言えば、この日に近衛が崩御し(直ぐ下に「近衛院崩」とあり)、翌日(七月二十四日)に後白河が踐祚し、後白河はやがて十月二十六日に即位している(次行に「十月廿六日帝即位」とあり)。『歴代天皇・年号事典』三七二―ページ参照。

(18) この「六月晦日〇六十七歳」は、実は翌年(丙戌、仁安元、一一六六)のことである。左に移した方がよからう。

(19) この「奥州〇死去」は、一般には前年(丁未、文治三、一一八七)のことだといわれる。右に寄せた方がよからう。

(20) この「永平道元和尚入宋」云々は、一般には翌年(癸未、貞応二、一一二二)のことだといわれる(正法眼蔵)。この行、左に寄せた方がよからう。

(21) ここに数項目あるが、実は何れも当年(戊申)ではなく、うち「六月五日泰時〔村〕合戦」は前年(丁未、宝治元、一一四七)のことで(宝治合戦)、他の項目は翌年(己酉、建長元、一一四

九) のことだといえる。

(22) この「統古今廿卷」云々は、ここで朱線により翌年(丁卯、文永四)に移しているが、寧ろ前年(乙丑、文永二、一二六五)に移した方がよからう。例えば『国史大辞典』(吉川弘文館)第七卷「統古今和歌集」項(久保田淳氏執筆)において、統古今和歌集(二十卷、十一番目の勅撰和歌集)は、文永二年(一二六五)十二月二十六日奏覧され、三年三月十二日竟宴が行われたとある。なお、この点、『永光寺年代記』では文永二年(乙丑)条に「撰統古今集」とみえる(『加能史料研究』2号—一九八六年三月—所収、石川県立図書館加能史料編纂室「永光寺所蔵永光寺年代記について」)。

(23) ここ(丁丑、建治三、一二七七)に「太元世祖元年」とあるが、これは、十五年余り遡った「庚申文応」欄(文応元、一二六〇)に移した方がよからう。なお同欄には、既に「趙宋理宗景定元年」(南宋年号が記入されている。またこの「太元世祖元年」は、本書において王朝名「(太)元」を用いた唯一の箇所である。

(補注1) 因みに天延(元年、九七三年)の改元日付は、一般(通説)には十二月二十日とされるが、本書『日本帝皇年代記』では「十二月廿二日庚子改元」とある。これについて『日本紀略』には「(十二月)廿日庚子、(中略)今日、改元天延」などに見える(『大日本史料』一編十四)。ここに本書の記事は、日付のみ正すべきで(廿二日↓廿日)、日付の干支(庚子)はそのままよい。この点、承保(元年、一〇七四年。国史大系12『扶桑略記』第三十参照)や元永(元年、一一一八年。『中右記』—『大日本史料』三編十九参照)の改元の場合も同様で、要するに日付のみ誤写し

たといえる。

(補注2) このうち例えば昌泰(元年、八九八年)の改元日付は、一般(通説)には四月二十六日とされるが、本書『日本帝皇年代記』では「八月十六日乙卯改元」とある。また天元(元年、九七八年)の改元日付は、一般には十一月二十九日だが、本書では「四月十五日改元」とある。『歴代天皇・年号事典』を繙くに、「昌泰」については、通説の他、「四月十六日、八月十六日の異説がある」とみえ(一四三ページ)、「天元」については、通説の他、「一説に四月十三日・十五日・十九日、五月七日とある」とみえる(一五一ページ)。「昌泰」項・「天元」項ともに山田英雄氏執筆。これら両年号の改元日付の場合、本書の説も、既にこの事典に異説として含まれているといえる。

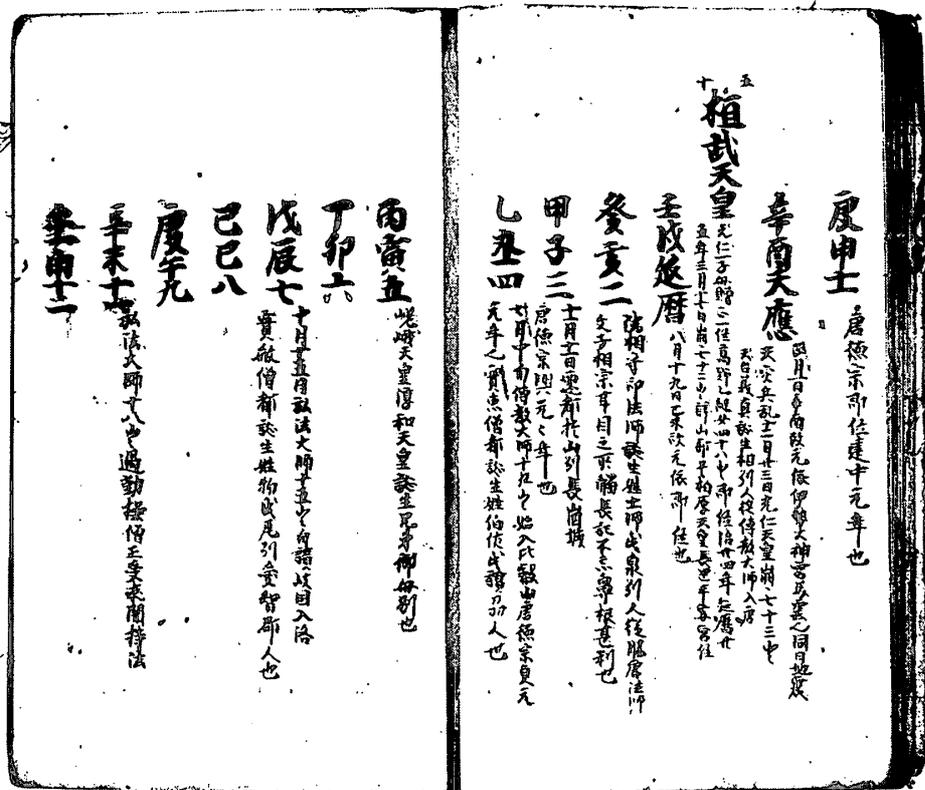
(補注3) なお高野山(金剛峯寺、古義真言宗)から分離して新義真言宗(覚鑿・大伝法院(根来寺)が形成されて行く過程や新義真言系の座主・学頭など(高野山大伝法院座主・密厳院院主・大伝法院学頭と根来寺学頭)については、根来山誌編纂委員会編・和高伸二監修『根来山誌』(和歌山県那賀郡岩出町、一九八六年。特に一三一—一四三ページ参照)と坂本正仁「醍醐寺所蔵大伝法院関係諸職の補任次第について」(『豊山教学大会紀要』16号、豊山教学振興会、一九八八年)の記事が的確であり、本書『日本帝皇年代記』に見える記事内容も、これら諸論稿の記事に概ね符合している。坂本論文(上記)のコピーに際して、史料編纂所本郷恵子氏にお世話になった。

(補注4) ここに掲げた日本関係の高僧たち(密教—天台宗・真言宗・新義真言宗、禅—臨済宗・曹洞宗。最澄(無学祖元)は、本書『日本帝皇年代記』においては何れも生・没記事が揃っている

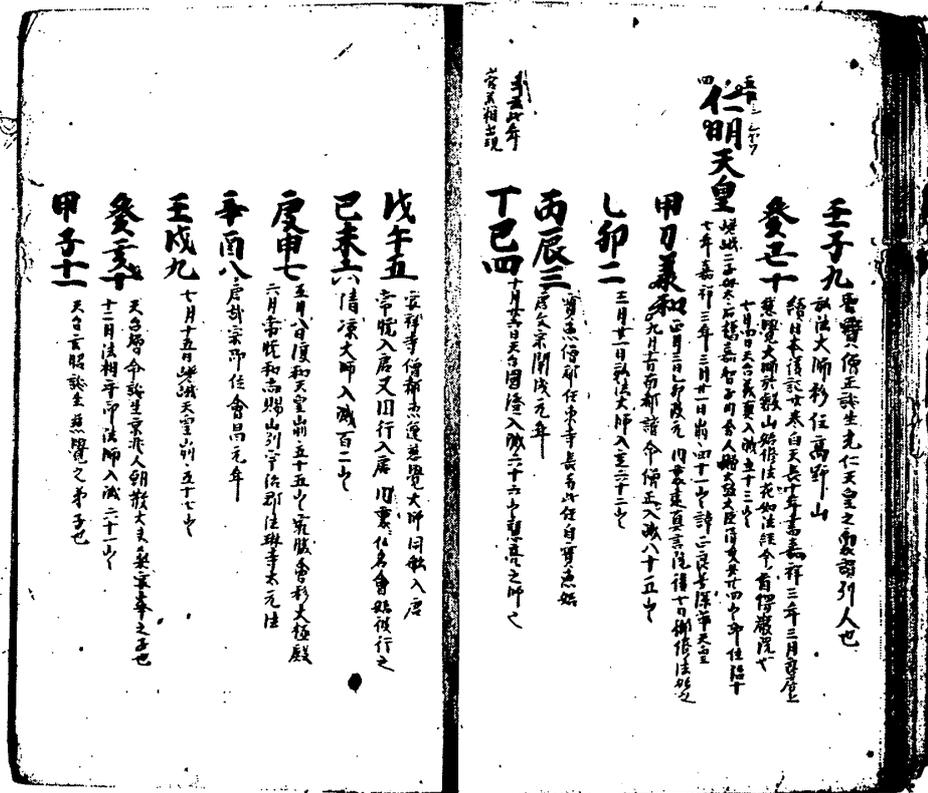
が（兼備）、『和漢年代記』（長野県・光前寺所蔵、前出）で点検するに、事情は違う。同書において、生・没記事が揃っているのは最澄・円仁・円珍（天台宗）、空海（真言宗）、円爾弁円（臨済宗）のみで、頼瑜（新義真言宗）については全く見えない。

そもそも『和漢年代記』とは、史料編纂所架蔵の写真帳三冊からなり、写真帳奥付に、長野県光前寺所蔵、昭和三〇年六月六日撮影となっている（光前寺は長野県南部の伊那地区所在）。原物未見であり、同所の『史料蒐集目録』（明治）昭和の長野県関係数冊）を点検したが、同書『和漢年代記』関係の記事は一向に見当たらない。同書の原物は、確かに三冊（上巻、中巻、下巻）か
らなっており、本書『日本帝皇年代記』と同様、ともかく地方に存在する貴重な年代記だといえる。時代が下るにつれ、記事内容に地域性が強まって行く（特に美濃国と土岐氏、斎藤氏関係多し）。
同書において、各巻の上段は中国関係で、下段は日本関係であり、
具体的には次のように題されている。

- （上巻）上段―「震旦皇代年号記上巻」、
下段―「日本皇代年号記上巻」
- （中巻）上段―「真丹年代記中巻」、下段―「日本年代記中巻」
- （下巻）上段―「震旦年代記下巻」、下段―「日本年代記下巻」



〔図1〕 入来院家所蔵『日本帝皇年代記』の「五十 桓武天皇」部分
（今回収録の冒頭部分）



〔図2〕 入来院家所蔵『日本帝皇年代記』に見える声点の例
(天皇名「仁明」と年号「承和」に対して)

<p>三月廿天下五劫願寺凡九三方 三百三十六処觀之看者千七百処</p>	<p>九月廿日敕明達年十月馬金法 延喜傳於御願啓諸序</p>	<p>乙 北漢大會元</p>	<p>十 天德 天早天木 秋澤邊最前身珠拜 十月廿日</p>	<p>丁 唐交泰元・漢天宮元 法眼祥 于野父益化・永明道潛禪師化</p>	<p>二 秋延昌為僧正</p>	<p>未 偽周恭帝末制</p>	<p>三 開顯帝生</p>	<p>中 趙宋太祖末制 姓趙諱普朗 凡十六代合</p>	<p>四 八月廿三日大雲生上 土月四日赤孫王經基 年</p>	<p>丙 五月六日皇光寺 晴瑞化下二歲</p>	<p>應和 小橋高元出家于院曆年三月四月初 前和 東大與福始施布帛據史</p>	<p>戌 乾德元 天台遵式生</p>	<p>二 秋覺起生父梅列住吉庄賀武秋僧寶 住覺武卒依和覺法師勸振秋實觀竹雨</p>	<p>亥 乾德元 天台遵式生</p>	<p>三 三月十九日慶雲林寺塔自月廿日設法花 構延了清涼殿延南北都名德千人五日 十座論詮聖理・聖王入於六波羅達慶 護金書九般若經</p>	<p>甲 子</p>	<p>康保 五月五日秋延昌年攝慈念三月九 日天台座主任鑰朝・龍聖為僧正此 秋坂本勸字舍始 早魁土月廿日秋淨 農平于雲古寺一建石寺寺 秋長隆 補内供奉十師師</p>
---	------------------------------------	----------------	------------------------------------	--	-----------------	-----------------	---------------	---------------------------------	------------------------------------	-------------------------	---	--------------------	---	--------------------	--	------------	---

〔図3〕 長野県・光前寺所蔵『和漢年代記』中巻(上段に「偽周〜」「趙宋〜」の接点あり。未=己未、959年、日本・天徳3年)